

ぼくの妹に

ぼくは四年生になるまで一人っ子でした。友達^{ともだち}が兄弟^{きょうだい}の話をするたびに、兄弟がほしいと思っていました。そんな日は決^きまって家に帰ると、

「妹か弟ができないかなあ。うーんとやさしくするのになあ……。」
と言^かっては、お母^{かあ}さんをこまらせました。

そのぼくに、兄弟ができたのです。けれども、お母さんは体が弱く、妹をうむときに、命^{いのち}があぶないかもしれないということでした。でもお母さんは、

「せっかくさずかった命を大切にしたい。」
と言^かってうむことを決めました。病院^{びょういん}の先生も、無事^{ぶじ}に赤ちゃんがうまれるようにじゅんびをしてくださいました。

そして、待^まちに待った妹が生まれました。でも、ぼくは、妹が生まれた日も、その次^{つぎ}の日もそのまた次の日も妹に会うことができませんでした。

「なぜ妹に会いに行っっちゃだめなの。」

ぼくはお父^{とう}さんに聞きました。お父さんは、

「とつても小さく生まれたから、まだひろきは会えないんだよ。」

と言いました。

妹は「みすず」と名付けられました。妹が生まれて五日目に、ようやく妹に会うことができず、保育器の中の妹は、二本のチューブをつけていました。

「どうしてみすずは、目を開けないの。」

ぼくが心配になってお母さんに聞くと、お母さんはなみだをためて言いました。

「みすずは、保育器の中でがんばって生きているのよ。きっと元気になるわ。」

妹はおなかの病気で、食べ物にも注意して生活しなければなりません。ぼくは、

(兄として、みすずのためにできることは何でもやろう。)

と心の中で決めました。

みすずは生まれてから半年たって退院しました。

「ひろきはお兄ちゃんなんだから、みすずをよろしくね。」

と、お母さんが言いました。ぼくは、兄としてみすずの世話をがんばろうとやる気まんまんでした。

みすずは、毎日ねてばかりでした。目を開けているときでも、お母さんだけにしか笑顔を見せません。いくらぼくがあやしても、あまり笑わないのです。みすずが生まれてからは、お母さんはみすずにつきつきりで、ぼく



のことをあまりかまってくれません。

(きっとお母さんは、ぼくよりみすずの方が大切なんだ。)

ぼくは、やきもちをやくようになりました。

ある日、ぼくは、お母さんから妹にふとんをかけるようにたのまれました。

(今はまだ暑^{あつ}いから、もう少ししてからふとんをかけてあげよう。)

ぼくはそう思っつて、すぐにふとんをかけませんでした。その日、お母さんはとてもいそがしく、いつものようには妹の世話ができなかつたのです。

しばらくして、ぼくは妹にふとんをかけわすれていたことに気^き付^づきました。つい、テレビに夢^む中^{ちゆう}になって、日がしずんだことに気^き付^づかなかつたのです。そのとき、妹^なが泣^なき出^でしました。買い物から帰^{かえ}ってきたお母さんがかけつけてきました。

「ひろき、みすずにふとんをかけてつたのんでおいたのに、どうしたの。」

「たのまれたときは暑^{あつ}くて、もう少し後^{あと}でと思^{おも}つたら、わすれちやつたんだ……。」

と、ぼくは答^{こた}えると、お母さんは言^いいました。

「みすずは、少しのことでもおなかをこわしてしま^まうのよ。お兄^{あに}ちゃん^{ちゆう}だから、病^{びやう}気^きのみすずちゃん^{ちゆう}を大切^{たいせつ}にしてね。」

ぼくは「お兄^{あに}ちゃん^{ちゆう}だから」と言^いわれるのがいやになっていました。

泣きつづけるみすずを病院へつれて行くことになりました。ぼくも車に乗り、お母さんと妹と病院までいっしょに行きました。お母さんと妹が応急処置室おうきょしよちしつに入りました。どれくらいの時間がたったでしょうか。十分ぐらいだったかもしれませぬ。でも、ぼくにはとても長く感じかんられました。ようやく妹の手当てが終おわり、お母さんが先生と出てきました。

ぼくは泣きながらかけよって妹にあやまりました。その様子ようすを見ていた先生が、しずかにおっしゃいました。

「わたしも、きみと同じ年ぐらいのときに弟が生まれてさみしい思いをした。でも弟が交通事故じこでなくなつたときは、言葉ことばにできないくらい悲かなしかったよ。」

ぼくのむねがじいんとあつくなりました。

「みすずのためには思つたんです。苦しめるなんて思つてもいなかつたんです。」

「分かつているよ。ただ病気の妹さんは、しっかり見守みまもらないとね。」

「先生、ごめんなさい。」

「五才だつたきみがけがをしたときも、お母さんはとても心配して病院にかけつけてきたんだよ。」

病院の先生の言葉を聞いて、ぼくはあらためて命について考えました。